

# 五月雨

一葉稿

青空文庫



いけ さき あやめ  
 池に咲く菖蒲かきつばたの鏡に映る花一本ゆかりの色の薄むら  
 さきか濃むらさきならぬ しろもとゆひ 白元結きつて放せし文金の高鬚も  
 この おな たけなが さくら 好みは同じ丈長の櫻もやう淡泊として色を含む姿に高下なく  
 こゝろへだ 心に隔てなく墻にせめぐ 同胞はづかしきまで思へば思はるゝ水  
 うを きみ な わなん と魚の君さま無くは我れ何とせんイヤ汝こそは大事なれと頼みに  
 たの まつこずゑ ふぢ はなぶさ しつ頼まれつ松の梢の藤の花房かゝる 主 従 の中またと有り  
 なしもとなにがし ふうか むすめ いうこ や梨本何某といふ富家の娘に優子と呼ばるゝ容貌よし色  
 ほそ まゆ かすみ とほやま 白の細おもてにして眉は※の遠山がた花といはゞと比喻を引

くもこぢたけれど二月ばかりの薄紅梅あわ雪といふか何か知ら  
 ねど濃こからぬほどの白しろいもの粉たまむしに玉虫いろの口紅くちべにを品ひんよしと喜よろ  
 こぶ人ひとありけり十九といへど深窓しんそうの育そだちは室咲むろぎも同じこと世よ  
 の風かぜし知らねど松まつ風の響ひびきは通かよふ瓜つまご琴ことのしらべに長ながき春日はるびを短みじ  
 かしと暮くらす心こころは如何いかばかり長閑のどけかるらん頃ころは落花らくくわの三月ぐわむん盡ち  
 ればぞ誘さそふ朝あさあらしに庭にはは吹雪ふぶきのしろ妙たへも流石さすがに袖そでは寒さむからで蝶てふ  
 の羽はうらの麗朗うらくとせし雨あまあがり露ぬれ椽ゑん先に飼かひ猫ねこのたま輕かるく抱だ  
 きて首玉くびたまの絞しぼり放ばなし結ゆひ換かゆるものは侍女こしもとのお八重やへとて歳としは  
 優子ゆうこに一劣おとれど劣おとらず負まけぬ愛敬あいけうの片かた壓おさ誰たれゆる寄よする目め  
 元もとのしほの莞爾にっこりとして手てを放はなしつ不圖ふと見返みかへりて眉まゆを寄よせしが又また  
 故ことにホへと笑わらつて嬢じやうさま一寸ちよつと御覽遊ごらんあそばせ此このマア様子やうすの可笑をかしい

ことよと面白げおもしろに誘いざなはれて何なんぞとばかり立たちいづ出る優いうこ子お八重やへは  
 何故なぜに其そのやう様なことが可をか笑わしいぞ私わたしには何なんとも無なきをなやと惱なやまし  
 げにて子猫こねこのヂヤレるは見みもやらで庭にはを眺ながめて茫ぼうぜん然じやうたり嬢じやうさま  
 けふこころわるうござ今日けふもお不こころわるうござ快御坐こころわるうございますか否いや左様さやうも無なけれど何どうも此處こゝが  
 と押おして見みする胸むねの中うちには何なにがありや思おもふ思おもひをし知られじとか詞ことば  
 をかへて八重やへやお前まへに問とふことがある春はるにつきての花はな鳥どりで比くらべ  
 て見みて何なにが好すきぞ扱さても變かはつたお尋たづね夫それは心こころ々々でも御坐ございませ  
 うが歸きかん鴈あはが憐ぞんれに存ぞんじられます左さりとは異いなことぞ都みやこの春はるを見み  
 す捨すて、行ゆく情じやうなしがお前まへは好すきか憐あはれといへば深山みやまがくれの花はなの  
 心こころが嘸ひがかしと察さつしられる世よにも知しられず人ひとにも知しられず咲さきて散ちる  
 が本意ほんいであらうか同おなじ嵐あらしに誘さそはれても思おもふ人ひとの宿やどに咲さきて思おもふ人ひと

おもに思はれたら散るとも恨みは有るまいもの谷間の水の便りがなく  
 は流れて知られる頼みもなしマアどの位悲しからうと入らぬ事な  
 がら苦勞ぞかして流石に笑へばテモ嬢さまは花の心を宜く御存  
 じ私しが歸鴈を好きと云ふは我身ながら何故か知らねど花の山の  
 あかつきづきよ 曉 月夜さては春雨の夜半の床に鳴て過ぎる聲の別れがしみ  
 〃 〃と身にしみて悲しい様な淋しいやうな又來る秋の契りを思  
 へば頼母しいやうにもあり故郷へ歸るといふからして亡き親の  
 事が思はれますと打しほるれば夫は道理わたしでさへも乳母の  
 事は少しも忘れず今も在世なら甘へるものをと何ぞにつけて戀し  
 ければ子の身では如何ばかり心ぼそくも悲しくも有らうなれど及  
 ばずながら私しは力になる心姉と思ふてよと頼むは可笑しけれど

としうへ 歳上なれば其約束ぞ何時もく云ふことながら私しは眞實の  
 はらから 同胞と思ひますと慰められて嬉しげに御縁あればこそ親どもば  
 かりか私しまでめぐり廻つて又の御恩海とも山とも口には如何も  
 申されねどお前さまのお優しさは身にしみて忘れませぬ勿躄  
 なけれどお主様といふ遠慮もなく新參の身のほども忘れ  
 て云ひたいまゝの我儘ばかり兩親の傍なればとて此上は御  
 座いませぬ左りながら悔しきは生來の鈍きゆゑ到底も御相談  
 の相手にはなされて下さる筈もなし別ものに遊ばすと知りながら  
 お恨みも申されぬ身の不束が恨めしう存じますとホロリとこぼ  
 す膝の露を優子不審しげに打まもりて八重は何が氣に障つてか思  
 ひもよらぬ怨み言つもりて見よかし何の隔てゝ隠しだてをするも

のぞ母さまにさへ申さぬことも遂ひに話さぬ時はなきを今日に限  
つて其やうな事ははれる覚えは何もなければマア何と思ふてぞと  
いふ顔じつと打仰ぎて夫々それが矢張りお隔て何故その様にお  
藏くし遊ばす兄弟と仰しやつたはお偽りか、偽りでは無けれ  
ど隠くすとは何を、デハ私しから申しませう深山がくれの花のお  
心と云ひさして莞爾とすれば、アレ笑ふては云はぬぞよ

## (一)

思ひ入る路は一筋なれと夏引きの手引きの糸の乱れぐるしきは戀  
なるかや優子元來才はじけならず柔和しけれど惻發にて物の道



とはり  
 理あきらかに分別ながら闇らきは晴れぬ胸の雲にうつくと  
 して日を暮らすをお八重しかぞと見て取りぬ我れも思ひの無き身  
 ならねば他人ごとなりとも悲しきを假初ならぬ三世の縁おなじ  
 乳房の寄りし身なり山川遠く隔たりし故郷に在りし其の日さ  
 ひがしかたあしむへ東の方に足な向けそ受けし御恩は斯々此々母の世にて  
 は送りもあえぬに和女わすれてなるまいぞと寐もの語に云ひ聞か  
 され幼な心の最初より胸に刻みしお主の事ましてや續く不仕  
 合に寄る方もなき浮草の我れ孤子の流浪の身の力と頼むは  
 外になし女子だてらに心太く都會の地へと志ざし其目的に  
 は譯もあれど思ひはいすかのはしも無く尋ぬる人を引かへて尋ね  
 ぬならねど身に恥づれば我れとは訪はれぬお主のもとへ又見出さ

れて二度の恩あるが中にも取分けて嬢さまの御慈愛は山の中の  
 峯たかきが上も高く海の中の沖深きが上も深しお可愛や誰れ人  
 を彼のやうに思しめして御苦勞なき身の御苦勞やら我身新參の  
 勝手も知らずお手も用のみ勤めれば出入のお人多くも見知らず  
 想像には此人かと思ゆるも無けれど好みは人の心々何か  
 お氣に染しやら云はで思ふは山吹の下ゆく水のわき返りて胸ぐ  
 るしさも嘸なるべしお愼み深さはさることなれど御病氣にでも  
 萬一ならば取かへしのなるべきならず主は誰人えぞ知らねど此  
 戀なんとしても叶へ參らせたし嬢さまほどの御身ならば世界に  
 苦もなく憂ひもなく御心安くあるべき筈をさりとは又苦の世  
 の中やと我身に比べて最憐がり心の限り慰められ優子眞實たの

もしく深くぞ染めし初はつ花はなごろも色いろには出いでじとつゝみしは和女そなたへ  
 の隔かくしん心ならず有ありやう様は打うち明あけてと幾いくたびも口くちもと元もとまでは出いでしも  
 のゝ恥はづかしさにツイ云いひそゝくれぬ和女そなたはまだ昨日きのふ今日けふとて見みま参あ  
 らせし事ことも無なきならんが婢女をんなどもは蔭かげぐち口くちにお名なは呼よばずて光みつう  
 氏ぢさまといふとかやお姿すがたは察さつせよかし夫それに引ひかれてゝは無なけれ  
 ど彼かの人は父ひとさま無む二ごの御懇意ごこんいとて恥はづかしき手前てまへに薄うす茶ちや一服ぷまゐ参あ  
 らせ初そめしが中々なか／＼の物思ものおもひにて帛紗ふくささばきの静しづこゝろなく成なり  
 ぬるなり扱さてもお姿すがたに似にぬ物ものがたき御氣象ごきしやうとや今いまの代よの若者わかものに  
 珍めづらしとて父様とゝさまのお褒ほめ遊あそばす毎ごとに我わがことならねど面おもて赤あかみて  
 其坐そのざにも得堪えたへねど慕したはしさの數かずは増まさりぬ左さりながら和女そなたにすら云い  
 ふは始はじめて云いはぬ心こゝろは描ゑがかぬ晝るもおなじ事こと御覽ごらんじ知しる筈はずもあらね

ば萬もし一の頼たのみも無なきぞかし笑わらはるゝか知らねども思おもひ初そめし最はじめ初は  
 より此このねが願かなひ叶かなはずは一生しやひとり一人ひとりで過すぐす心こゝろ憂うれきに送おくる月つき日のひほど  
 に思おもひこがれて死しねばよし命いのちが若もしも無つれな情なくて如いか何かに美うるはしき  
 夫おくがた人たむかへ給たまひぬとも愛あいらしき兒ちご生うまれ給たまふとも聞きく身みのつらさ  
 が思おもはるゝぞとてほろゝと打うち泣なけばお八や重へかなしく身みを寄よせてお  
 前まへさまは何なぜ故ゆゑそのやうに御おこゝろ心こゝろよわい事こと仰おほせられるぞ八や重へは元もとよ  
 來りぐどん愚おろ鈍どんなり相あ談なしてからが甲か斐ひなしと思おぼしめしてか馴なれぬ御おつか使つか  
 ひも一心しんは一心しん先しん方かなたさまのやう様やうな御おな情さけしらずで有あらうとも貫つらぬか  
 ぬといふ事ことある様やうなし何なにともしてお望のぞみ屹きつ度と叶かなへさせますものを  
 御おうちば内ち端ばすぎたのものお物おも思おもひくよゝゝ斗ばかり遊あそばせばきのふけふこそ昨日きのふ今日けふは  
 御おいろ顔いろ色いろもわるし御おわづら病びやうひでも遊あそばしたら御をふたかた兩りやう親せんとさまは更さらなる事こと

なり申すも慮りよぐわい外いもとおもふながら妹と思ぞとての御慈愛じあいに身みは姉あねうへ上をを  
 もうけし心こゝろお前まへさま大切たいせつなほどお案あんじ申さずには居をりませぬを  
 忌いまはしや何なにごとぞ一いつしやう生ひとり一人よで世おを送おくるの死しんで思おもひを遁のがれ  
 たしのと突つきつめた御心おこゝろに必かならずお成なり遊あそばすなと宥なだめる身みさ  
 へ眼めはうるみぬ、堪かん忍にんせよかし和女そなたにまで苦くをかけてあらぬ思おも  
 ひに心こゝろを盡つくすが我わが身みながら口惜くちをしきなり左さりとても彼かの人の  
 事こと斷あきらめ念ねんがたきは何なにゆゑぞ云いはで止やまんの決けつ心しんなりしが親切しんせつ  
 な詞ことばきくにつけて日頃ひごろの愼つしみも失なくなりぬと漸やう々くせまりくる娘むすめ  
 氣ぎに涙なみだに咽むせびて良時やまありしが、八重やへさぞ打うちつけなと惘あきれもせん  
 が一いつしやう生ねがの願ねがひぞよ此このこゝろ心こゝろ傳つたへては給たまはるまじや嬉うれしき御返おへ  
 事んじき聞ききたしとは努ゆめ々く思おもはねど誰たれ故ゆゑみじかき命いのちぞとも知しられて

は果てなば本望ぞかしと打しほるれば、又しても其様なこと御  
 前さま此々とお傳へ申さば好きお返事は知れた事なり最早くよ  
 〳とは思しめすな、否や〳それは八重が知らねばぞ杉原さま  
 は其やうな柔弱な放なお人で無ければ申出してからが心  
 配なり不埒者いたづら者と御怒りにならば何とせん、夫は餘  
 りのお取こし苦勞岩木の中にも思ひのなきかは無情き仰せの有る  
 筈なし扱も御戀人は杉原さまとお名は何とぞ、三郎さま  
 と申のなり此頃來給ひしは和女が丁度不在の時よ一足違ひに  
 御歸宅ゆゑ知らぬのは道理と云ひかけてお八重の顔さしのぞき此  
 願ひ若し叶はゞ生涯の大恩ぞかし諄うは云はぬ心は是よ  
 と合はす手に嬉しき色はあらはれたり

## (三)

ひばり 雲雀のあがる 麥生むぎふなゝめに 見渡みわたしながら 岡をかのすみれを 摘つみあらそひ  
 むか 昔むかしは何なんの苦くか有ありし 野河のがはの岸きしに 菊きくの花手折はなたをるとて 流れなが一筋ひとすじか  
 わた ち渡わたりし 給たまふ時とき我われはるかに 歳とし下したの身みの コマシヤクレにも 君きみさま  
 たもと の袂たもとぬれるとて 袖そで※かけて 參まゐらせしを 如何いかに 人ひとにも 笑わらはれけん 思おも  
 へば 其その頃ころが 浦山うらやまし 君きみさま 東とう京きやうへ 歸かへりたま 給たまひし 後のちさま／＼  
 續つく不仕合ふしあわせに 身代しんだいは 亂離らり骨廢こつぱいあるが 上うへに 二親おふ引ひつゞきての  
 びようし 病死びようしといひ 憂うきこと 重かさなる 神無かみな月袖つきそでにもかゝる 時雨しぐれ空ぞらに 心こゝろ  
 のしめる 我われを取とらへて 郡長ぐんちやうの 忤せがれづらが 些少いさゝかの 恩鼻おんはなに かけ

ての無理難題むりなんだいやり返かへして遣りたけれど女子をなごの身みは左様さうもならず柳やなぎ  
 にうけるを宜よきことにして金かねやらん妾せうになれ行々ゆくゆくは妻つまにもせん  
 と口惜くちをしき事ことの限かぎり聞きくにつけても君きみさまのことが懐なつかしく或ある  
 夜よにまぎれて國くにを出いでつ漸やうく々東京とうきうへは着つきし物ものの當處あてどなければ  
 御行衛更おゆくゑぎらうに知しるよしなく様さま々／＼の憂うき艱難かんなんも御目おめにかゝる折をり  
 の褒ほめられ種ぐさにと且かつは心こころに樂たのしみつゝ賤いやしい仕業しわざも身みは清きよし行な  
 ひさへ汚けがれずばと都みやこ乙女おとめの錦にしきの中なかへ木綿衣類もめんぎものに管笠すががさ脚絆きやはん  
 はづかしや女子をんなの身み不似合ふにあひの菓くだもの賣うりも一重ひとへに活計みずぎの爲ためのみな  
 らず便たよりもがな尋ねたやの一心しんなりしが縁ゑにしあやしく引ひく方かたあり  
 て不圖ふとよ呼いび入いれられし黒塗堀くろぬりべいお勝手かつてもとに商あきなひせし時後ときあとにて聞き  
 けば御稽古おけいこがへりとや嬢じやうさまの乗めしたる車勢くるまぜきほひよく御門内ごもんうちへ引ひ



入るゝとて出でんとする我と行違ひしが何に觸れけん我がさし  
 たる櫛車の前にはたと落しを知らず曳しかばなど堪るべき微  
 塵になりて恨みを地に残しぬ嬢さま御覽じつけて氣の毒がり給ひ  
 此そこねたるは我身に取らせよ代りには新らしきのを取らすべし  
 との給ひしかど元來落せしは我が粗忽なり曳かれしも道理破損  
 しとて恨みもあらず況てや代りをとの望みもなし是れは亡母が  
 紀念のなれば他人に奉るべき物ならずとて拾ひ納めて懷にせしを  
 いとゞしく御不愍がり扱は親も無き人か憐れのことや先庭口よ  
 り我が部屋まで來よ身の上も聞きたしとて連れ給ひぬ今こそ目馴  
 れたれ御座敷の結構お庭のたゞずまひ華族さまにやと疑がひ  
 しは一に嬢さまの御言語容姿にも依りし物か其お美しくしき嬢さま

御親切ごしんせつにも女子同志をなごどうしは互たがひぞとて御優おやさしき御詞おことば我われもしきりに  
 嬉うれしくて尋たづぬる人ひとありとこそ明あかさゞりしが種いろく々くの物ものがたり語りに  
 和女そなたの母御はごは斯かくく々くの人ひとならずやと思おもひ寄よらぬ御問おとまことひ誠まことに若しかぞ  
 何なんとして御存ごぞんじと云いへば忘わすれて成なるべきか和女そなたと我われとは兄きやうだ  
 弟いぞかし我われは梨なし本もとの優いうなるをとて手てを取りての御喜およろこび扱さて  
 は母はが乳ちを參まゐらせたる君きみなりしか御目おめにかゝりし嬉うれしさに添そへて  
 落おちぶれし身みはづかしと打泣うちなきしに榮枯えいこは時ときなるものを歎なげく事ことかは  
 よろづわ萬よろづは我われれに委まかせよかし悪わるき様やうにはなすまじければ今日けふより此處こゝ  
 に身みを落おちつけずや母は様さまには我われ願ねがはんとて放はなし給たまはず夫おく様さまも  
 又またくれ／＼の仰おほせに其そのまゝの御奉公ごほうこう都會みやこなれぬ身みとて何なにごと  
 も不東ふつゝなるを彼かれは彼此かれこれは此これと陰かげになりてのお指圖さしづに古參こさんの婢女ひと

も侮あなどらず明日きのふの我われ忘れしわす様なやう樂らくな身みになりたるは嬢じようさまの御お情なさけ一ななり此御恩このごおんなん何なんとして送おくるべき彼の君かさまに廻めぐり逢あはゞ二ふたりとも〴〵〴〵ろあははな人共ひと々々心こころを合あわせてお話しはな相手あひてに成なるべきをなと何なににつけても忍しのばるゝは又またか彼の人の事ことなりしが思おもひきや嬢じようさま明日今日のお物ものの思もひ命いのちにかけてお慕したひなさるゝ主ぬしはと問とへば杉原三郎すぎはら ちろうどのとや三輪みわの山本やまもとしるしは無なけれど尋たづぬる人ひとぞと知しる悲かなしさ御存ごぞんじ無なければこそ召めしつか使つかひの我われふし拜をがみてのお頼たのみ嬢ぢやうさま不憫いとやとおも思おもはぬならねど彼かの人何ひととして取持とりもたるべき受うけあひ合あては立ちし物ものの此文このふみには何なんの文もん言ごんどういふ風ふうに書かきて有あるにや表おもてが書かきのときときわぎ常盤木とこのきみまるとは無情つれなきひとへとこといふ事ことか岩間いはまの清しみづ水づと心こころ細ほそげには書かき給たまへど扱さても〴〵御手おてのうるはしさお姿すがたは申まをすも更さら

なり御心だてと云ひお學問と云ひ欠け處なき御方さまに思は  
 れて嫌やとはよもや仰せられまじ我れ深山育ちの身として比べ  
 物になる心はなけれど今日までの憂き苦勞は何ゆゑぞ逢はんと思  
 ふ夫一に萬の願ひをかけ置きしに今日の前に逢ふ日は來ても逢ふ  
 が悲しき事義に成りぬ嬢さまの御恩は泰山の高きも物の數かは  
 よしや蒼海に珠を探れと仰せらるゝとも夫に違背はすまじけれ  
 ど我が戀人周旋んことどう斷念めてもなる事ならず御恩は御  
 恩これは是なり寧そお文取次いだる体にして此まゝになすべきか  
 否や／＼夫にては道がたゞ實は斯々の中なりとて打明けなば  
 嬢さま御得心の行くべきか我こそは夫で宜けれど彼れほどまで  
 に思しめし入れたもの左らばと云ひて斷念のつく筈なし我身の

願ねがひが叶かなへばとて現げんざい在こゝろにお心こゝろ知りながら夫それもつらし是これも憂うしと  
 迷まよひに心こゝろも夕ゆふぐれ暮そらの空やへお八重なつく／＼詠がむれば明日あすも晴はれ日ひか西にし  
 の方かたのみ紅くれなみの雲くもたな引きぬ

## (四)

をとこをんなはふし法師わらはも童かほも容貌よきよきが好すきぞとは誰たれ色いろ好このみの言ことの葉は  
 なりけん杉すぎ原はら三郎さうらうと呼よばるゝ人面ひとおもざし清きよらかに擧げ止にく優雅からずたが目め  
 に見みても美男びなんぞと見みゆればこそは罪つみつくりなれ我われゆゑに人ひと二人ふたりま  
 で同おなじ思おもひにくるしむ共ともいざやしら櫛がきの若葉わかばの露つゆかぜに散ちる夕ゆふぐ  
 れの散歩さんぽがてら梨本なしもとの娘病氣むすめやうきにて別莊べつそうに出養でやう生じやうとや見舞みまひ

てやらんとて柴しばの戸とおとづれしにお八重やへはじめて對面たひめんしたり逢あ  
 はゞ云いはんの千言百言ちこともくことうさもつらさも胸むねに呑のみて恩おんとも言いはず  
 義理ぎりとも言いはず沸わきかへる涙なみだも人事ひとごとにして御不憫おいとしや嬢ぢやうさま此程このほど  
 よりのお煩わづらひのもととはと云いはゞ何ゆゑなにならず柔和おとなしき御生質たちとて  
 口くちへとては出だし給たまはぬほど猶なほさらに御おいとほしお心こころは中々なか々く我が  
 云いふやうな物ものにはあらず此このお文御覽ふみごらんぜばお分わかりになるべけれど御お  
 前まへさま無情つれなきお返事へんじもし遊あそばされなば彼あのまゝに居給あたまふまじき御ご  
 決心しんぞと見る目めは如何いかにつらからぬ事ことか久ひさし振ぶりにて御目おめにかゝ  
 りし我身わがみの願ねがひ是れ一こなり叶かなへさせ給たまはゞ嬉うれしかるべきをとて取と  
 次りつぐ文ふみの思おもひ切りても涙なみだほろほろ膝ひざに落おちぬ義理ぎりといふもの世よに  
 無なかりせば云いひたきこといと多おほし別わかれしよりの辛苦しんくは如何いかに或ある

ときはあらぬ人に迫ひとせまられて身の遁のがればの無なかりし時とみさを操をはおもし命いのち  
 は鷲がもう毛ゆきの雪よの夜やいばに刃と手に取りしことも有ありけり或あるとき時ゆくゑはお行衛たづ  
 ね詫わびて恨うらみは長ながし大おほか河かはの水みづに沈しづむ覺悟かくごも極きわめしかど引ひかれし後うし  
 髪がみの千筋ちすぢにはあらで一筋ひとすぢに逢あふといふ日を頼たのみにして今日けふまでも  
 過すこせし身みなりと云いひたけれど嬢じようさまの戀こひも我わが戀こひにも淺あささ深ふかさの  
 あるべきならず我われまだ其そのこと事くちを口くちにせねば入いりわけ譯ごぞん御存じなきこじなきこ  
 そよけれ御恩ごおんがへしにはお望のぞみ叶かなへさせまして悦よろこび給たまふを見るが  
 樂たのしみぞと我われを捨すてての周旋とりもちなるを他あだしごとと思おもふまじ左さるにて  
 も君きみさまのお心氣こころぎづかはしと仰あふぎ見みれば端はしなくも男をとこはじつと直視ながめ  
 るたりハツと俯うつむ向むかく櫛はちもみぢ紅葉こうえつのかげ美うるはしき秋あきの山やま里さとに茸たけがり  
 して遊あそびし昔むかしは蝶てふく々まゆめ鬚すげの夢ゆめとたちて姿すがたやさしき都みやこ風ふうたれに

おといろ 劣らん色なるかは愁ひを含めど愛らしき雨の撫子しほれて床し  
 らうこゝなん 三郎の心何と知らねど優子の文を手にとりつ浅からぬお心辱けな  
 らうよろ して三郎喜こびしと傳たへ給へ外ならぬ人の取次こと更に嬉し  
 ここのふみ ければ此文は賜はりて歸宅すべしとて懐中に押いれつゝ又こ  
 さてじよう そと坐を立つに扱は嬢さまの心汲とり給ひてかと嬉しきにも心ほ  
 をとこかほ ちあが上る男の顔そと窺ひてホロリとこぼす涙を藏くし嬢さま  
 わがみ にも嘸ぞお喜び我身とても其通りなり御返事屹度まちますと云  
 うなづき えば點頭ながら立出る廻り椽のきばの橘そでに薰りて何時か  
 なかがき つき 月に中垣のほとり吹のぼる若竹の葉風さらくとして初ほとゝ  
 まつ ぎす待べき夜なりとやをら降たつ後姿見送る物はお八重のみ  
 へや ならず優子も部屋の障子細目に明けて言はれぬ心 《こゝろノ



〳〵を三郎一人すゞしげに行々吟ずる詩きゝたし

## (五)

便りまつ間の一日二日嬉しきやうな氣づかひな八重に遠慮は入  
 らぬものゝ又言ひ出すかと思はるゝも恥かしくじつと堪ゆる返事  
 の安否もしやと思へば萬一やになるなり八重は大丈夫と受合へ  
 ど夫は氣やすめの詞なるべし彼の文とても御受取になりしやな  
 らずや其場で其ま御突き戻しになりたるを我れに力落させまじ  
 とて八重の繕ひて居るにはあらずや否や〳〵八重として其様の  
 ことある筈なし人を疑がふは罪ふかき事なり一日二日待給へ好

き御返事の參るは定ぞと言ひしに違ひは無かるべし若しさうなら  
 ば何とせん八重は上もなき恩人なれば何ごとなり共氣に入るこ  
 ととして悦ばせたとし歳は下なれど分別ある人として言少なれば願ひ  
 は有や望みはなしや知れ難きを何とせん扱も人妻となりての心  
 得は娘の時とは異なる物とか御氣に入らば宜けれど若し飽かれ  
 なば悲しき事よ先それよりも覺束なきは彼の文の御返事なり御  
 覽にはなりたり共其まゝ押まろめ給ひしやら却りて御機嫌をそこ  
 ねもして愛想づかしの種にもならば云はぬに増る愁らさぞかし君  
 さまこそ無情とも思ふ心に二は無し不孝か知らねど父様母さま  
 何と仰せらるゝとも他處ほかの誰れ良人に持べき八重は一一生  
 良人は持たずと云ふものから我が身とは自ら異りて關係はること

なく心こころやす安やすかるべし浦山うらやましやと浦山うらやまるゝ我われをば知らで吐息といき  
 をもらしぬお八重やへはつく／＼有あし日の事ことを思おもふに男をとこ心の頼たの  
 みがたさよ我われ周旋とりもちする身みとして事整こととのふは嬉うれしけれど優子いうこどのゝ  
 心宜こころく見みえたり三郎喜ちゅうよろこびしと傳つたへ給たまへとは餘あまりといへど昔むかしを  
 わすたまれ給たまひしお詞ことばなりおもふは我わが身みの妬ねたみにやお主しうさま様ゆゑには身み  
 を殺ころして忠義ちうぎを盡つくす人ひとさへ有あるを我われ一人ひとりにて憂うきをしのばゞ何い  
 づくこと處をさも事なく納なまるべきなり何氣なにげなき嬢じようさまが八重やへや八重やへやと相談はなし  
 相あひて手に遊あそばすを御恨おうらみ申つみは罪つみのほども恐おそろしゝ何なにごとも殘のこさず忘わす  
 れてお主しうさまこそ二代だいの御恩ごおんなれ杉原三郎すぎはら ちうといふお人元ひともと來より  
 お知しる人ひとにもあらず況ましてや契ちぎりし事ことも何なにもなし昨日きのふ今日けふ逢あひしばか  
 り若しかもお主しうさまの戀こひ人ひとに未練みれんのつながる筈はずはなし御縁ごゑん首尾しゆびよ

とく整のへて睦ましく暮し給ふを見るが切めての樂しみなり我れは  
 のぞ望みとて無き身なれば生涯この家に御奉公して御二方さま  
 あさゆふ朝夕の御世話さては嬰子さま生まれ給ひての御抱き守り何にも  
 こゝろあれ心を責めて仕へんか夫は何としてもなる事ならず兎ても角て  
 うも憂き世なれば人訪はぬ深山の奥にかき籠りて松風に耳を澄まさ  
 よば宜かるべけれど夫すら彼の人の見捨てゝは入り難かるべしとてつ  
 く／＼と打歎けど人に見すべき涙ならねば作り笑顔の片頬さ  
 びしく物案じの主慰めながら我れ先づ乱るゝ尊の戀はくるしき  
 もの物なるにや成るとは見えて覺束なき人の便りをまつとは云はず  
 すぎはら杉原さまはお廿四とやお歳よりは老けて見え給ふなり和女は何  
 おもと思ふぞとて臃氣なこと云ふて見る心や流石に通じけんお八重

あるひにこ 一日莞爾やかに嬢さまお喜び遊ばす事あり當て、御覽じろと久し  
 振りの戯れ言さりととは餘りに廣すぎて取り處が分らぬなりと微  
 笑ば左らば端を少し聞かし參らせんお前さま何より何よりお嬉  
 しと思しめす事が有べし夫なりとて容易は言ひもせず夫ぞとは  
 知れど猶も知らぬ顔に八重が例に似ぬことよ先づ云ふて聞かして  
 も宜さそうなど打怨ずれば其やうに御いそぎなされますなど打  
 笑ひながら彼の君より御返事が參りしなり是がお嬉しからぬ事  
 かと呟かれて耳の根くわつと熱くなりつ胸とゞろかれて嘯む袖の  
 下に密と置く藻しほぐさ俄には手にも取らぬをお八重察して進め  
 つゝ取まかなひて封を切らずに文にはあらで一枚の短冊なり  
 けり兩女ひとしく見る雲形

茂りあふわか葉にくらき迷ひかな

みるべきものを空の月かげ

意味の存する處何方ぞや茫として闇きわか葉のかげいと迷ひは  
 茂り合ふばかり晴るよし無き空の月の心 《こゝろく》に判  
 じて見れど何れ眞意と得ぞわき難く喜こぶべきか歎くべきかお八  
 重はお八重優子は優子斯く云はれなば斯くせんを決心互に堅け  
 れど思ひの外なる返しには何と定めて何とせん未練は流石ありそ  
 海のおきて見つ又取りて見つながめに飽かねど吐息されて八重は  
 マア何と思ふぞと人の詞を待て見るあな覺束なの三十一文字や

怪あやしや三郎らうの便たよりふつと聞きこえず成なりぬ待まつには一日ひとひも侘わびしきを不  
 審ぶかしかりし返事へんじの後のちけふ今日きたまや來給きたまふ明日あすこそはと空そらだのめなる日ひを  
 重かさねて十日半とうかはんつき月つきさては廿日はつかう憂うれき身みにつらき卯月うづきも過すぎたり五月雨さみだれ  
 ごろのしめり勝がちに軒のきの忍しのぶ艸くさは我わが類たぐひの引ひきては葺ふかねど池いけのあ  
 やめの根ねながき思おもひにかき暮くらされて袖そでにも水みづかさの増まさりやす  
 らん此處こゝは別べつ荘そうの人氣ひとげも少すくなく氣きに入りいの八重やへを置おきては別べつ所そ  
 莊うも守もりの夫婦ふうふうのみなれど最さい愛あいの娘むすめ病やう氣きとの事ことなり本宅ほんたくよ  
 りの使つかひ絶たへま無なければ事ことによそへて杉原すぎはらのこと問とはするに本宅かしこ  
 にも此頃このころさらまゐりに參まゐり給たまはずといふ左さるにても何なんとし給たまひしにや  
 我わが心こゝろをさなくて卒爾うちつけに文ふみなど參まゐらせたるを如何いかに厭いとはしと

おほししながら返しせざらんも情なしとて彼れよりは夫となく御出の  
 なきか此頃のお哥の心は如何に茂るわか葉の今こそは闇られ  
 ど時節を待たば空の月の逢みるべきぞとならば嬉しけれど若しや  
 の願ひに左様見ゆるにや寧そ愁らからば一筋ならで頼みのある丈  
 まどはるゝなり扱もお便りの聞えぬは何故我れ厭はせ給ひなば此  
 處へこそ御入來なく共本宅へまで御疎遠とは不審しゝ夫ほどま  
 でに御嫌ひになるほどなら優しげな御詞なぜ仰せおかれけん八  
 重が思ふも恥かしきまで彼の時は嬉しかりしを此まゝに見返りも  
 し給はずは今さら面ても向けがたし悲しき事よと娘氣に頼みを  
 かけて見つ又ときつ思案にもつるゝ撚糸の八重が歎きは又異な  
 り茂る若葉の妨げと仰せられしは我が事ならずや闇き迷ひと歎じ



たま 給へど 夫れ 悟りたれば こそその 御取持ち なれ 思ひ 合ふ 中のお 兩方  
 に 我が 生涯の 望みも 頼みも 御譲り 申して 思ひ置 置くこと 些少  
 なきを 何はゞ かりての 御遠慮 ぞや 身を 観ずれば 御恨みも 未練も  
 なに 何も ならず お二方 さま 首尾 とゝの ひし 曉には 潔よく 斯々して 流石  
 は 貞操を 立てると だけ 君さまに 知られ ならば 夫を 思での 我れ なるに 此  
 のみ 身ある 故に 嬢さまの 戀叶はずと せば 何と せん 身退ぞ くは 知らぬ ぬ  
 らねど 義理 ゆる 斯くと 御存じ にならば 御情 ぶかき 御心 として  
 ひとと 人は 兎も あれ 我よく ばと 仰せらるゝ 物で なし 左らでも 御弱き お生  
 質なるに 如何 につき めた 御覺悟を も 遊ばす まじき 物ならず 御最  
 愛のお 一人 娘とて 八重や 何分 たの むぞと 嚴格い 大旦那 さ  
 まさへ 我身 風情に 仰せらるゝ は 御大事 さの あまり なるべし 彼につ

け是これにつけ氣きづかはしきは彼かの人の事ことよ有ありし日ひの對面たいめんの時とき此處こゝ  
 に居ゐ給たまふとは思おもひがけず郷里きやうりのことは我われ聞ききたり辛しん苦くさこそ  
 なるべけれど奉公ほうこう大だい切じに勉つとめ給たまへと仰おほせられしが耳みみに殘のこりて忘わす  
 られぬなり彼あれほどにお優やさしからずば是これほどまでもなげに歎なげかじと  
 斷たち難がたき絆きづつらしとて人見ひとみぬ暇ひまには部屋へやのうちふに伏ふし沈しづみぬ何いづ  
 れ劣おとらぬ双美人そうびじんに慕したはるゝ身み嬉うれしかるべきを何なにを厭いとふてか三郎ちやう  
 かき絶たえて影かげも見みせず疑念ぎねんは重かさなる五月雨さみだれのくも、薄うすらぐべき由よしも  
 なくて、世よをうみ梅實うめの落おつる音おともそゞろ淋さびしき日ひを幾いく日ひ、をぐら  
まどき窓まどのあけくれに、をち返かへりなく山時やまほととぎす鳥すの、から紅くれなみにはふ  
 り出いでねど、涙なみだに袖そでの色いろかはるまで同おなじ歎なげきを別べつに知しる主従しうじうの思おも  
 ひさても果敢はかなし優子ゆうこはいとゞ世よを知らぬ身みのお八重やへが素振そぶり得あ

も察さつせず氣きの毒どくや我身わがみ大事だいじにかけるとて瘦やせ見みゆるほど心しん配ばいさ  
 せし和女そなたの情なさけは忘れぬなり左さりながら如何いかほど盡つくしてくる、共とも  
 なるまじき願ねがひぞとは漸ねが 《やうく》に斷あきらめ念ねんたり夫それにつきて  
 又また別に父様母さまへの御願おねがひあれど御二方おかたなり和女そなたなりに歎なげきを  
 かくるが愁つらきぞとてしみ／＼と物語ものがたりつお八重やへの膝ひざに身みをな  
 げ伏ふして隠かくしもやらぬ口説くどきごとにお八重やへわれを忘れわすて抱いだき合あひ  
 ことば 詞ことばもなくよゝと泣なきしがお前まへさまに其そのやうな御覺悟おかくごさせますほど  
 なら此この苦勞くらうはいたしませぬ御入來おいでの無なきは不審いづかしけれど無情つれなき  
 おへんじ 御返事おへんじといふにもあらぬを早はやまつての御考おかんがへは御前まへさまの樣やうに  
 も無なし今いましばしの御辛抱ごしんぼうぞ其そのうちには何なにともして屹度きつとお喜よろこば  
 せ申まをべし八重やへが一心しんを憐あはれとも思おぼしめして其そのやうな悲かなしいことお

聞かせ遊ばすなとて力を添へぬ優子嬉しく手に手を取りて前の世  
 では何でありしやら兄弟にもなき親切この後とも頼むぞや是よ  
 りは別しての事何ごとも汝の異見に隨がはん最早今のやうな事云  
 ふまじければ免してよと詫らるゝも勿体なく待てば甘露と申ま  
 すぞやと輕るげに云へど義理は重し袖に晴れ間は見えぬ物の限り  
 あればにや今日珍づらしく鳶なきて雨の餘波に軒ばの露に照る日  
 あたらしく玉をみがきて庭の木かげも心地よげなるを籠居ての  
 み居給ふは御躰にも毒なる物をとお八重さま／＼に誘ひて邊  
 りちかき野の景色田面の庵の侘たるも又をかしかるべし御覽ぜず  
 やとわりなくすゝめて柴の戸めづらしく伴ひ出でぬ人の心のうや  
 むやは知らずや茂る木立すゞしく袖に吹く風むねに欲しゝ植はた

す小田をだの早苗さなへ青々あほくとして處々ところ／＼に鳴なき立たつ蛙かわずの聲こゑさま／＼  
 なる彼あれも歌うたかや可をか笑をしとてホ、笑ゑむ主しうに我われも嬉うれしく彼方かしこの萱かや  
 ぶき此こゝの垣根かきねお庭にはの中に欲ほしきやうなり彼あの花はなは何なにならんと小走こぼし  
 りして進すすみ寄よりつ一枝ひとえだ手折たをりて一輪りんは主しう一輪りんは我われかざして見み  
 るも機嫌きげん取りなり互たがひの心こゝろは得えぞしらず畔あぜ道みちづたひ行ゆき返かへりて遊あそ  
 ぶ共ともなく暮くらす日ひの鳥とりも寐ねに歸かへる夕ゆふべの空そらに行ゆく雲くも水みづの僧そう一人ひとりたゝ  
 く月下げつの門かは何方いづこぞ浦うら山やまの身みの上うへやと見み送おくくれれば見みかへる笠かさ  
 のはづれふたり兩女ふたりひとしくヲ、と※さけびぬ



# 青空文庫情報

底本：「武蔵野 第三編」今古堂

1892（明治25）年7月23日出版

初出：「武蔵野 第三編」今古堂

1892（明治25）年7月23日出版

※変体仮名は、通常の仮名で入力しました。

※「優子」に対するルビの「いうこ」と「ゆうこ」、 「嬢」に対するルビの「じやう」と「ぢやう」、 「主様」に対するルビの「しゅうさま」と「しうさま」、 「主従」に対するルビ「しゅうじう」と「しうじう」の混在は、底本通りです。

入力：万波通彦

校正：Juki

2020年4月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 五月雨

一葉稿

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>